

軒丸瓦製作手法の変遷

－飛鳥地域出土の7世紀前半代の資料を中心にして－

納谷 守幸

要 旨

わが国における造瓦技術は、崇峻元年（588）の飛鳥寺の造営時に百済から渡来した4人の瓦博士によってもたらされた。飛鳥寺創建時の軒丸瓦は、瓦当文様や製作手法の違いから2種に大別できる。この2種の存在は、瓦博士がもっていた製作手法が2派存在していたことを反映している可能性が強い。

7世紀になると、大和を中心に各地で本格的な寺院の造営がおこなわれる。そこで出土する軒丸瓦は、瓦当文様や製作手法の特徴から、多くが飛鳥寺創建時の手法を改良させていったものであると考えられる。その一方で、豊浦寺や坂田寺の造営時には飛鳥寺造営当初の軒丸瓦の直接的な系譜下にはない軒丸瓦が出現し、新たな造瓦技術が伝わった可能性も考えられる。

わが国で造瓦が始まったところを巨視的にみると、640年代の山田寺の造営前後に造瓦技術全般に大きな変化が認められる。したがって、6世紀末の飛鳥寺の造営以降を第1期とすれば、640年代の山田寺の造営時に第2の画期が認められ、大いに評価することができる。

I. はじめに

6世紀末の飛鳥寺以後、大和を中心に各地で本格的な寺院が造営されるようになった。造瓦技術は、飛鳥寺の造営に際し、百済から渡来した瓦博士によってもたらされた¹⁾。このときに軒丸瓦を作る技術も伝わった。もちろん、朝鮮半島からの造瓦技術の伝来は飛鳥寺造営時だけにとどまるものではなく、その後も何回かあったと思われる。一方、国内においても造瓦技術の改良が進んだと推定できる。

小稿では、6世紀末の飛鳥寺から7世紀中葉の山田寺の造営にいたる約50年間を対象にして、飛鳥寺・豊浦寺・坂田寺・木之本廃寺・山田寺などの飛鳥地域の古代寺院と、若草伽藍・四天王寺から出土する軒丸瓦を中心に扱う。そして、『日本書紀』などの史料と各寺院から出土する軒丸瓦の同範関係などから軒丸瓦に一定の年代を与えたいうで、その軒丸瓦の製作手法の特徴を観察する。さらに瓦の製作に携わった人々（以下、「造瓦集団」とよぶ）の動向についても、瓦の同範関係や製作手法の共通性などから考えてみたい。

なお、上記の分野については先学によりすでに多くのすぐれた研究が蓄積されており²⁾、小稿はそれらをふまえつつ論を進めるものである。

II. 実年代を推定できる軒丸瓦と製作手法の変遷

ここではまず飛鳥地域の各寺院の軒丸瓦を中心にして、史料と軒瓦の同範関係から一定の年代を与え、次にその製作手法を観察することにしよう。

a. 飛鳥寺

飛鳥寺（明日香村飛鳥）は、『日本書紀』などに記載された内容から、崇峻元年（588）に造営が始まり、推古17年（609）には主要伽藍が完成したと考えられる³⁾。

飛鳥寺出土の7世紀前半代の軒丸瓦は、瓦当文様からみると、蓮弁の先端に桜花状の切り込みを入れて反転をあらわす軒丸瓦（以下、「花組」の軒丸瓦とよぶ）と、蓮弁の先端に珠点をおいて反転をあらわす軒丸瓦（以下、「星組」の軒丸瓦とよぶ）の2種に大別できる⁴⁾。

出土量が最も多いのは、花組の素弁十弁軒丸瓦（1）[飛鳥寺Ⅰ型式]である（奈文研1958）。（1）は塔・金堂を中心に伽藍全域から出土し、また、百済と類似した瓦当文様をもつ軒丸瓦とするのにふさわしい。したがって、（1）の初現は588年以降に求められる。なお、（1）の範が摩耗した段階の製品が高麗寺跡（京都府山城町）で出土しており、飛鳥寺の造営後に高麗寺への範の移動を想定できる（奈良博1970、山城町教委1988）。

飛鳥寺では（1）について星組の素弁十一弁軒丸瓦（2）[飛鳥寺Ⅲ型式]が多く出土し、（1）と（2）で飛鳥寺から出土する7世紀前半の軒丸瓦の大半を占めている⁵⁾。これは、飛鳥寺の主要伽藍の造営過程で、（2）が（1）とともに主体的に使用されたことを示している。したがって、（2）を609年以前に出現したと考えてよい。また星組の軒丸瓦は百済にもあることから、始点は588年としてもまちがいはないであろう⁶⁾。（1）と（2）は胎土・焼成が異なり、この点からも別の系譜下にあると考えられる。なお、飛鳥寺の主要伽藍の造営時には、軒平瓦は使用されていない。

（1）の初期段階（1a）は、瓦当の厚さが約1cmと非常に薄い。中房は中央部よりも周縁部のふくらみがわずかに大きく、断面は凹面形をなす⁷⁾。瓦当裏面にはなで調整もおこなっているが、粘土を範に押し込んだときに生じた凹凸の痕跡を残す例が多いので、裏面の調整にあまり注意をはらっていなかったと考えられる。丸瓦の接合前に、広端の凸面・凹面の一方か両面を斜めに削り、その後で瓦当裏面上端に押しあてる⁸⁾。さらに、接合部に薄く補強用粘土をはりつけて固定する。このような丸瓦と瓦当の接合に際しておこなわれる丸瓦先端の加工や瓦当裏面の調整を含めて「接手法」と呼ぶことにする。

一方、後出段階（1b）では中房周縁に1条の圏線を巡らしたり、蓮子を大きくするなどの範の彫り直しをおこなっている⁹⁾。瓦当は当初よりも厚い。丸瓦の接合後、瓦当裏面全体をなで調整するため、初期段階でみられた補強用粘土のはりつけ痕跡は、ほとんど残らない。さらに、瓦当裏面の周縁に沿って端部をなで調整してわずかに突出させたり、外縁側面に粘土を足してなで調整し初期段階より外縁を幅広くした例が多い¹⁰⁾。接手法は、丸瓦の広端を凹凸両面から斜めに幅広く削り、断面くさび形にしている。まれに、縦方向の刻み目をいれた例がある。なお、（1）には行基式丸瓦をもちいている¹¹⁾。

（1）の後出段階（1b）でみられた中房周縁に圏線を巡らす手法の系譜下にある軒丸瓦として、中房がわずかに突出し中房周縁に太い圏線を巡らし、1+5の蓮子を配する素弁十弁軒丸瓦があげられる。飛鳥寺と高麗寺で同範例が出土している¹²⁾。このように、飛鳥寺と高麗寺には2種の軒丸瓦が同範という強い結びつきを認めることができる。おそらく、飛鳥寺の主要伽藍の造営が終わった段階で、花組の軒丸瓦を製作した造瓦集団が山背に移動し、高麗寺に軒丸瓦を供給したのであろう。

（2）は、初期段階から（1）よりも瓦当は厚い。中房は扁平でわずかに突出するが、周縁端部のふくらみが中央部より大きい。瓦当裏面は中央部が周縁部より盛り上がり、同心円状のなで痕跡を残す例があることから、裏面の調整に回転を利用したと考えられている¹³⁾。接手法は、丸瓦の筒部先端を端面側と凹面側から切ること、断面片ほぞ形に切りかき、瓦当裏面上端に押しあてて接合する¹⁴⁾。次に、薄く補強用粘土をはりつけて固定する。範が磨耗し

た後出段階ほど瓦当は厚く、瓦当裏面のふくらみも強い例が多い。後出段階では(2)も(1)と同様に範の彫り直しにより中房周縁に1条の圈線を巡らしたり、蓮子を大きくしている。また、接合後に瓦当裏面全体をなで調整するため、接合粘土のはりつけ痕跡はほとんど残らない。

(2)の特徴は、瓦当裏面を回転を利用しなで調整したり、瓦当の筒部先端を片ほぞ形に切り欠く手法にある。このような製作手法は、百濟をはじめとした朝鮮半島に多くみられることから、日本において独自に発生したのではなく、むしろ、朝鮮半島から伝わったと考えてよい(亀田1982)。したがって、(2)も瓦博士の指導下に作られた可能性が強いのである。

ところで、(2)の丸瓦部には玉縁式丸瓦が使用されているが、その製作手法の特徴をみておくことにしよう¹⁵⁾。

飛鳥寺造営当初の玉縁式丸瓦は、筒部と玉縁部を別の粘土で作り接合粘土でつぐ手法(a手法)と、丸瓦の筒部を製作したのち筒部端をおりまげて玉縁部との連結面をつくり玉縁部を接合する手法(b手法)の2種に分類できる。a・b両手法とも丸瓦筒部と玉縁部の連結面(段部)の凹面に布目圧痕が残る。玉縁部凹面には、削りとなで調整をおこなう。また、a手法の玉縁式丸瓦には、筒部凹面に接合粘土のつぎめの痕跡を残したり、つぎめで剝離した例がある。b手法の玉縁式丸瓦は、連結面を作り出すために折り曲げたときに生じた溝状のくぼみを筒部凹面に残す例がある。このa・b手法の玉縁式丸瓦で以後主流となるのは、b手法のものである。筒部と玉縁部を一体で作る玉縁式丸瓦(c手法)は、山田寺の造営が始まる640年代になって出現したと考えられる。

さて、坪井清足は早くから飛鳥寺出土の丸・平瓦には製作手法が異なるものが存在することを指摘している(奈文研1958、坪井1985)。本稿でも、飛鳥寺出土の軒丸瓦に製作手法の異なる2グループがあることを述べてきたが、これは丸瓦の型式差とも対応関係にあるから、飛鳥寺造営時に2つの造瓦集団が存在したことは、まずまちがいないであろう。すなわち、行基式丸瓦を用いて瓦当裏面への接合前に丸瓦の筒部先端を斜めに削り、薄く補強用粘土をはりつけて固定するが、瓦当裏面の調整にはあまり注意をはらわない**花組**の軒丸瓦を作る集団と、玉縁式丸瓦を用いて、接合前に丸瓦の筒部先端を片ほぞ形に切り欠き、瓦当裏面には回転を利用したなで調整をする**星組**の軒丸瓦を作る造瓦集団が存在したと考えられるのである。

そして、この2つの造瓦集団は飛鳥寺造営当初から瓦を供給したと考えられるので、百濟から伝わった製作手法は2種あった可能性が強いのである。すなわち、588年にやって来た4人の瓦博士の中に、製作手法の異なる2派が存在したことを示すものではないだろうか¹⁶⁾。

b. 豊浦寺

豊浦寺(明日香村豊浦)の造営開始時期については、福山敏男らによる「舒明朝」説と、坪井清足らによる「推古朝」説の2説があるが、近年の豊浦寺周辺での発掘調査成果からみれば、造営開始は「推古朝」に遡る可能性が強いと推定されている¹⁷⁾。

1985年の奈良国立文化財研究所による向原寺境内の発掘調査では、講堂と考えられる遺構を一部検出し、講堂基壇築成に伴う整地土より古い土坑から、講堂に先行する建物(金堂か)に使用したと考えられる軒丸瓦がまとまって出土した(奈文研1986)。軒丸瓦は飛鳥寺と同範で素弁十一弁の(2)と星組の素弁九弁軒丸瓦(3)[豊浦寺Ⅱ型式B=飛鳥寺Ⅷ型式]である¹⁸⁾。

(2)は、飛鳥寺では全く範傷のないものから範が磨耗した段階の製品まで出土し、豊浦寺では範の磨耗した段階の製品が出土する。範の磨耗の進行からみると、(2)ははじめ飛鳥寺に供給されたが、豊浦寺の造営開始とともに豊浦寺にも供給されるようになったと考えられる。

一方、(3)は飛鳥寺での出土はごくわずかで、豊浦寺に主体的に供給されていたとみてよい。したがって、豊浦寺の造営開始は飛鳥寺から大きく遅れるものではなく、飛鳥寺の造営途中に始まっていたと推定できる。すなわち豊浦寺の造営開始は推古朝で、(3)は609年以前に出現していたと考えてよい。この点からすると、『元興寺縁起』にみえる推古11年(603)に推古天皇が豊浦宮から小墾田宮へ遷居した後に、豊浦寺を建立したという記事を積極的に評価することができよう。

ところで、豊浦寺とその南約200mに位置する平吉遺跡の発掘調査では、高句麗系と称される軒丸瓦が(4)[豊浦寺Ⅳ型式B]をはじめとして、数種類出土している(奈文研1976・1978・1986)。この高句麗系と称される軒丸瓦も高句麗から直接伝わったものではなく、百濟経由で日本に伝わったとする考えが有力であり(藤澤1961)、花組・星組の軒丸瓦と区別するために、小稿では「雪組」の軒丸瓦と呼ぶことにしたい。(4)が(2)(3)と同じ建物に葺かれたのかどうかは、今後の発掘調査により明らかになるであろうが、瓦当文様の変遷や豊浦寺・平吉遺跡出土の雪組の軒丸瓦を焼成したことが判明している隼上り瓦窯(京都府宇治市、宇治市教委1983)での状況などからみると、(4)は後述する塔・講堂所用の軒丸瓦より時期的に先行し、豊浦寺造営の初期段階で使用されたものであろう。

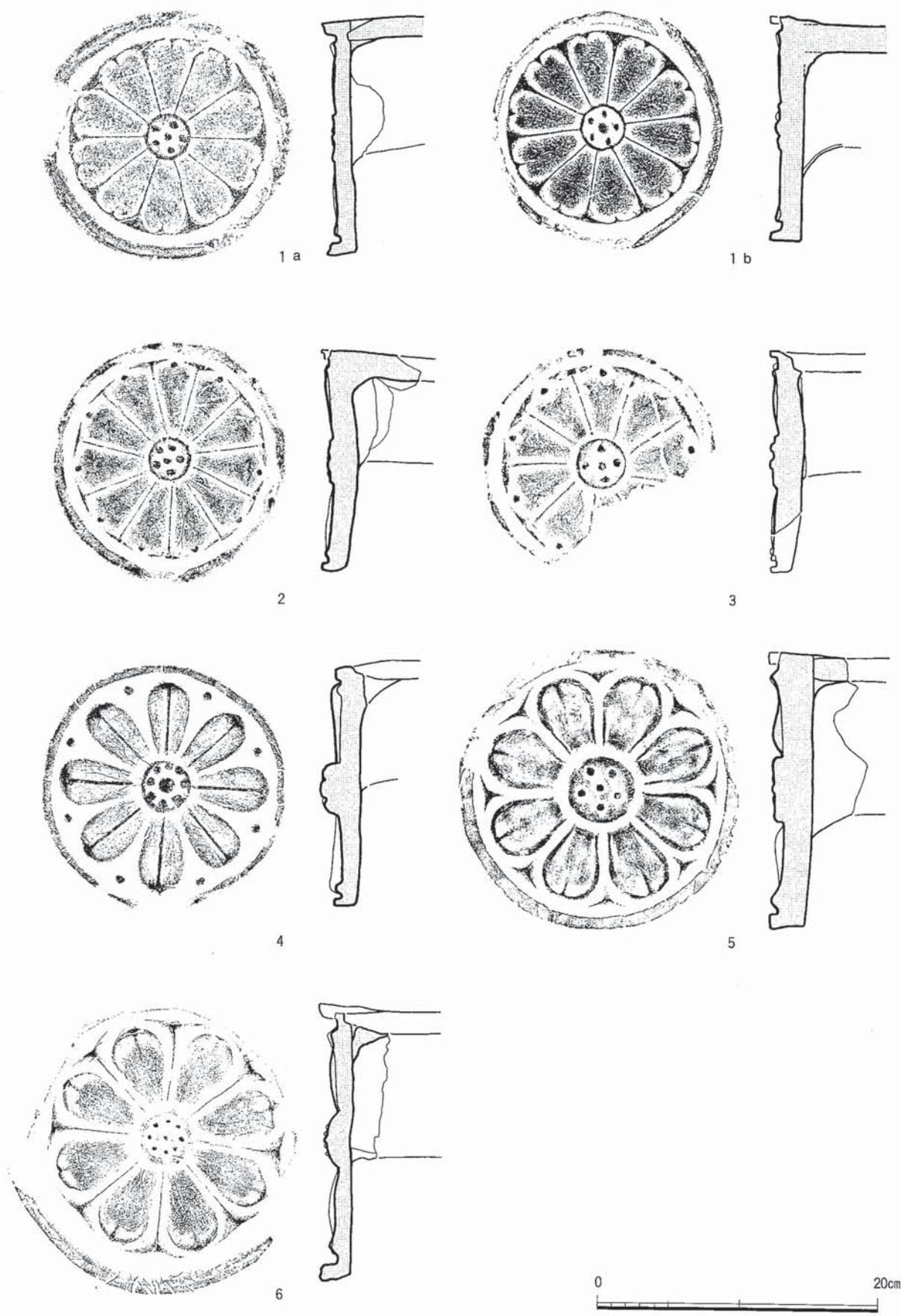
豊浦寺の塔所用と推定できる軒丸瓦(5)[豊浦寺Ⅶ型式A]は、『扶桑略記』に舒明6年(634)に塔の心柱を立てるという記事がみえるので、この記事に信憑性があるとすれば、そこに製作時期の一点が求められる。また、一般に古代寺院では塔の造営が講堂に先行することから、講堂所用軒丸瓦(6)[豊浦寺Ⅲ型式A]は(5)よりも後出する可能性が強い。

豊浦寺は蘇我氏と関係の深い寺院と推定できるので、蘇我蝦夷・入鹿が滅ぼされた大化元年(645)以降に大規模な堂宇の造営は考えがたく、少なくともそれ以前に講堂の造営に着手していたとみてよいだろう。(4)(5)(6)の新旧関係と年代観については、瓦当文様の変遷からみても矛盾はないと思われる。以上の豊浦寺出土の軒丸瓦は、軒平瓦をとまわらない。

次に、各軒丸瓦の製作手法を詳しくみてみよう。(3)は、(1)(2)よりも中房が一回り大きく、中房全体が平らでわずかに突出する。(3)の段階では、(1)(2)のように中房の周縁端を中央より突出させようという意識がなくなっている。(3)は瓦当裏面を回転を利用してなで調整し、接合前に玉縁式丸瓦の筒部先端を片ほぞ形に切り欠き、a手法の玉縁式丸瓦を用いるなど製作手法に(2)との共通点をみいだせる。また(3)は(2)と胎土・焼成が同じであることから、同じ造瓦集団が製作した可能性が強い。

(4)をはじめとした雪組の軒丸瓦は、中房が大きく突出し、弁中央に凸線や稜をもち、珠点やくさび形の間弁を配置するなど凹凸のはげしい瓦当文様であり、飛鳥寺の(1)(2)をはじめとする花組・星組の軒丸瓦の瓦当文様が比較的扁平であるのと異なっている。

また、雪組の軒丸瓦には、瓦当を範から外した後、外縁や外縁内側に削りやなで調整を加える特徴がある。このときについたヘラや棒先や指のあたりが、瓦当面に普遍的にみられる。ただし、外縁内側を「さわる」手法について注目してみると、それが内側全体に及ぶ例はまれで、大半は内側の一部にとどまっていることから、それが部分的な調整なのか判断しがたい。この外縁部分をさわる手法は、花組と雪組の軒丸瓦を製作した造瓦集団固有の特徴とすることができよう。一方、瓦当裏面はなで調整してほぼ平坦である。接合手法は、行基式丸瓦の広端部の凹凸面の一方か両方を斜めに削り、瓦当裏面と接合後に補強用粘土で固定する。そして裏面周縁部から丸瓦側端部の接合面にかけて削る例が多い。後出段階では丸瓦の筒部先端を凹凸両面



第1図 飛鳥寺・豊浦寺の軒丸瓦 (1 : 4)

から斜めに幅広く削り、断面くさび形にする¹⁹⁾。

このように、雪組の軒丸瓦には、製作時に削り調整を多く用い、かつ、箆をはずしたあとで瓦当文様に手を加えるという特徴がある。また、胎土がきわめて精良で焼成が堅緻である点も、花組・星組の軒丸瓦との違いとして指摘できる。

ところで、豊浦寺では講堂所用軒丸瓦(6)にも外縁の内側に削りやなで調整がみられ、(6)が雪組の軒丸瓦の系譜を引いていることを示している。(6)は、半球形の中房に1+8個の蓮子を配置し、瓦当は厚さ約2cmと比較的薄い。接合手法は、行基式丸瓦の筒部先端を凹凸両面から斜めに幅広く削り、断面くさび形にした後で両側端部を三角に切り欠く。さらに縦方向の刻み目を1~2cm間隔で両面にほどこす。そして、瓦当裏面上端に突きさし、薄く補強用粘土をはりつけて固定したのち、裏面全体をなで調整し平坦に仕上げる。裏面周縁部は、縁に沿ってなで調整し、端部をわずかに突出させた例が多い。飛鳥地域で丸瓦の筒部先端や広端に刻み目を入れる手法が普遍化するの、(6)以降である。また、丸瓦の両側端部を三角に切り欠く手法は飛鳥地域では他に類例をみない。

以上、豊浦寺出土の軒丸瓦をみてきたが、造営当初に星組の軒丸瓦を供給した造瓦集団と、雪組の軒丸瓦を供給した造瓦集団とが存在したことは、瓦当文様や製作手法の違いからも明らかである。

c. 坂田寺

『日本書紀』の記述は、坂田寺(明日香村阪田)の造営が古い時期に遡ることを示している²⁰⁾。調査で出土した軒丸瓦の中には、飛鳥寺(1)と類似した瓦当文様をもつ花組の素弁十弁軒丸瓦(7)[坂田寺1型式A]があり²¹⁾、(7)の次の段階で使用されたとみられる素弁七弁軒丸瓦(8)[坂田寺5型式A]と手彫り忍冬文軒平瓦(9)[坂田寺101型式A]も注目される。

(8)は、飛鳥寺(1)や坂田寺(7)などの花組の軒丸瓦や、飛鳥寺(2)(3)などの星組の軒丸瓦、豊浦寺(4)をはじめとした雪組の軒丸瓦とも瓦当文様の系譜が異なると考えられている。また飛鳥地域では飛鳥寺・豊浦寺造営時には軒平瓦がともなわず、坂田寺(8)の段階ではじめて軒平瓦が出現することも評価できよう。この段階で新たな造瓦技術が伝わった可能性が強いのである。

ところで、坂田寺は奥山久米寺・檜隈寺などとともに、出土軒丸瓦の種類が多いことも知られている。これは伽藍の整備に長期間を要したことを示しており、個々の軒丸瓦に年代を与えるのはかなり困難である。したがって(8)は(7)より後出するが、坂田寺出土の山田寺式軒丸瓦よりは先行すると考えられているので、下限は7世紀中葉においてよいだろう²²⁾。瓦当文様の変遷からみると、(9)が後述する山田寺の四重弧文軒平瓦より古いと考えられることとも矛盾しないと思われる。

それぞれの軒丸瓦の製作手法をみると、(7)は行基式丸瓦を用い、接合前に丸瓦の広端部先端を削っている。瓦当裏面には軽いなで調整をおこなう。このように、(7)には飛鳥寺(1)と瓦当文様だけでなく製作手法にも類似点がみい出せるのである。しかし、(7)と(1)は異箆であり、しかも胎土・焼成が異なるので、飛鳥寺に花組の軒丸瓦を製作した造瓦集団の一部が、坂田寺造営時に新たに瓦当文様を創作し軒丸瓦を供給したものであろう。

(8)は蓮弁が反転し、中房は大ぶりで突出し周縁に一条の圏線がめぐり、くさび形の間弁を配置するなど、(7)に比べて彫りの深い瓦当文様といえる。b手法の玉縁式丸瓦を用い、接合前に丸瓦の筒部先端を斜めに削っている。瓦当裏面はなで調整により平坦に仕上げる。こ

のように、(8)は(7)との類似関係もみられるが相違点も多い。また、(8)には飛鳥地域ではじめて軒平瓦がともなうことを積極的に評価すれば、この時期に新たな造瓦技術の導入があったとみてよいだろう。

d. 木之本廃寺

香具山の北西に位置する都多本神社周辺(檜原市木之本町)では、発掘調査のうちに藤原宮に先行する時期の瓦がまとまって出土した。まだ寺院に関連した遺構は検出されていないが、付近に寺院跡の存在が考えられるので「木之本廃寺」と称されている(奈文研1986・1987)。

軒丸瓦は、蓮弁に子葉を重ねるいわゆる山田寺式の単弁八弁軒丸瓦(10)で、一葉の忍冬文を型に彫り印鑑状にして連続に押捺した軒平瓦(11)が併せて出土し、いずれも吉備池廃寺(桜井市)と同範である。なお、(10)は範の違うA・B2種があり、A(10A)は四天王寺(大阪市、藤澤1967・八幡市教委1985)と、B(10B)は四天王寺および海会寺(大阪府泉南市、泉南市教委1986)と同範である。四天王寺所用の軒丸瓦は、平野山瓦窯(京都府八幡市;八幡市教委1985、大阪府枚方市楠葉東遺跡)で焼成されたことが判明している。

(10)を山田寺創建(金堂所用)の軒丸瓦(12)と比較すると、蓮弁の先端が小さく突出する特徴、中房は低い半球形を呈すること、内区と外区とのあいだを巡る一条の圏線が太くて高く突出すること、外縁の三重圏文が稚拙であるなど、瓦当文様の上で多くの古い要素が認められるので時期が先行する可能性がある(大脇1989b)。

(11)は法隆寺若草伽藍の塔所用軒平瓦(19)[斑鳩寺213型式B]と同一の型であるが、(11)が一方向的に連続押捺するのに対し、(19)は上下交互に押捺する違いがある。また、(11)には多くの傷が認められるので、(19)よりも後出することは明らかである。したがって、(10)も若草伽藍の塔所用軒丸瓦(17)(18a)[斑鳩寺6型式C・Da]よりも、時期的に後出する可能性が強い。(11)は普通の平瓦より厚く作られているが、直線顎で文様全体が写されていない。まれに三重弧文を施文した後に忍冬文を押捺した例があるので、一方ではすでに定型化した三重弧文軒平瓦が出現していたと考えられる。木之本廃寺で見られる三重弧文の溝は浅く、断面V字ないしU字状を呈する(奈文研1986・1987)。

平野山瓦窯では(10)と同範の四天王寺所用軒丸瓦とともに三重弧文軒平瓦が焼成されているが、木之本廃寺出土の(11)と同様に溝は浅い(八幡市教委1985)。このように木之本廃寺と平野山瓦窯出土の軒瓦には、軒丸瓦の同範関係だけでなく、軒平瓦についても密接な関係が認められる。範の移動だけでなく製作に携わった造瓦集団自体が、平野山瓦窯へ移動した可能性が強い。

(10A)は、丸瓦接合後に一方向のなで調整により瓦当裏面の凹凸をならしている。(10B)は瓦当裏面中央部が最もふくらむ凹レンズ状を呈し、同心円状のなで痕跡を残す例があるので、回転を利用して瓦当裏面の調整をおこなった可能性がある。(10A)(10B)は、ともに玉縁式丸瓦を使用し、接合前に丸瓦の筒部先端を凹凸両面から斜めに幅広く削って断面くさび形にする。まれに刻み目を入れた例がある。この(10)にみられる製作手法は、後述する若草伽藍の塔所用軒丸瓦のものと同様点がある。したがって、木之本廃寺造営に際し、軒平瓦の型だけでなく造瓦集団も斑鳩から飛鳥へ移動し、新たに山田寺式軒丸瓦の瓦当文様を製作したものであろう。そうであれば、若草伽藍→木之本廃寺(吉備池廃寺)→四天王寺(平野山瓦窯)という範と造瓦集団の移動も想定できる(上原1986)。

なお、木之本廃寺所用の丸・平瓦は飛鳥寺や豊浦寺出土例などよりも大型で、時期は後出す

るが、大官大寺出土例に類例がある。また、玉縁式丸瓦は筒部と玉縁部を一体で製作する手法（c手法）で、凹面の布目圧痕は玉縁部先端まで残る。はじめに玉縁部先端まで粘土をはりつけ、次に筒部上端に粘土を補足して段部を作り出し、筒部と玉縁部との段差をつけたものである。この手法は、段部の補足粘土が剝離した例が多いことから明らかである。

この都多本神社周辺に舒明11年（639）創建の百濟大寺を求める説があるが、(10) (11)の年代観と矛盾するものではなく、百濟大寺の有力な候補地の一つといえよう（和田1969、山崎1983、大脇1989b）。

e. 山田寺

山田寺（桜井市山田）の造営経過は、『日本書紀』と『上宮聖徳法王帝説裏書』からある程度知ることができる²³⁾。それによれば、山田寺では金堂の造営が最も先行し、金堂所用の単弁八弁軒丸瓦(12)と四重弧文軒丸瓦(13)には、造営がはじまる舒明13年(641)以降の年代を与えることができる²⁴⁾。(13)は、平瓦端部に粘土を補足して顎を作り出したのちに文様を施文する段顎の軒平瓦で、坂田寺や木之本廃寺などでみられる普通の平瓦より厚く作ったものを使う直線顎の軒平瓦とは製作手法が異なる。この段顎の軒平瓦は、山田寺造営時にはじめて出現したと考えられる。なお、(13)の重弧文の溝は木之本廃寺と同様に浅い。この重弧文軒平瓦の溝の深さに注目すると、初期の重弧文は木之本廃寺(11)・山田寺(13)のように溝が浅く、時期が後出するにしたがって川原寺や奥山久米寺出土例のように溝が深くなる傾向にある。これは山田寺所用の他の四重弧文軒丸瓦との比較からも明らかである。

軒丸瓦(12)は、瓦当裏面との接合前に丸瓦の筒部先端を片ほぞ形に切り欠き、さらに縦方向の刻み目を入れた例が多い。瓦当裏面はなで調整する。また、瓦当と丸瓦との接合後に補足の叩きしめをおこなっており、そのときの痕跡を丸瓦の凸面端部付近に残す例がある。c手法の玉縁式丸瓦を使用している。したがって、山田寺と木之本廃寺との前後関係はともかく、山田寺式軒丸瓦が出現する640年代には、玉縁式丸瓦の製作手法に大きな変化が認められるのである。軒丸瓦(12)は玉縁式丸瓦を用い、刻み目を入れたり補足の叩きしめをおこなうなど、飛鳥寺造営時からみれば技術的改良が進んだことは明らかである。

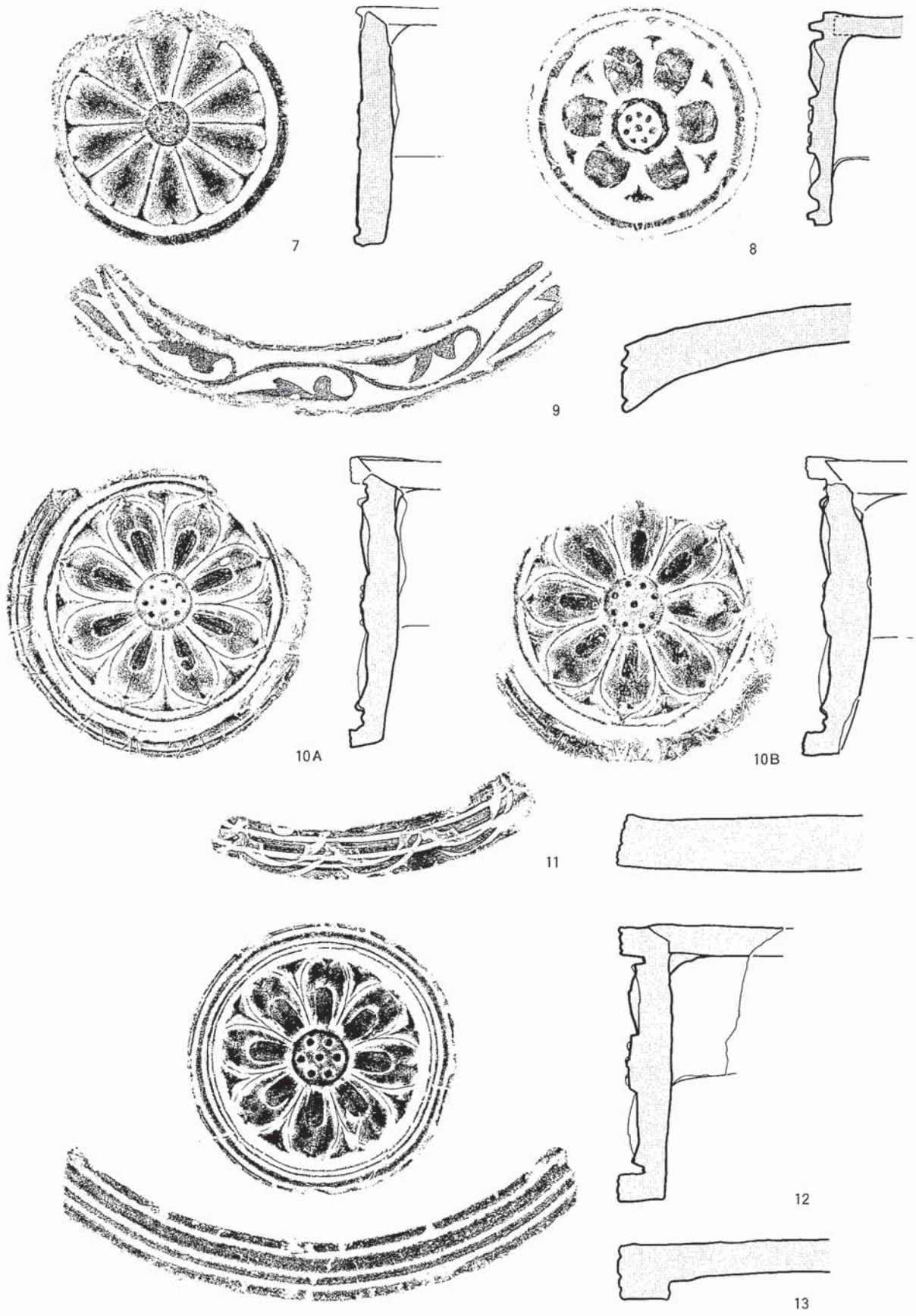
f. 若草伽藍

法隆寺若草伽藍では金堂の造営が塔に先行し、金堂には星組の素弁九弁軒丸瓦(14)〔斑鳩寺3型式Bb〕が主に使用されたことが判明している（文化庁1968）。

(14)は、飛鳥寺・豊浦寺・御所市上増出土例(3)と同範で、(14)のみに蓮子が2個追刻されており、時期は他の3カ所より後出する（上原1986）。(15)〔斑鳩寺4型式A〕は、のちに四天王寺創建の軒丸瓦として、範の磨耗した段階の製品が多く使用された（藤澤1967）。若草伽藍と四天王寺は、ともに聖徳太子と関係の深い寺院と考えられる。また、(14)は飛鳥寺と豊浦寺の(3)よりも後出するが、豊浦寺(3)は7世紀初頭の造営当初しか使われておらず、そこから斑鳩に移動して若草伽藍造営時に(14)を供給したにしても、7世紀第I四半期の中におさまることはほぼまちがいないであろう。

したがって、若草伽藍・四天王寺の造営は聖徳太子の生前に始まっていたと考えられ、(14) (15)には聖徳太子が没する推古30年(622)以前の年代を与えることができよう。また、金堂造営時には、手彫忍冬文軒平瓦(16)が伴うことも判明している。

塔所用の単弁八弁軒丸瓦(17)〔斑鳩寺6型式C〕と(18)〔斑鳩寺6型式D、a・bに細分〕は、組み合う手彫り忍冬文軒平瓦が、型押忍冬文軒平瓦(19)や木之本廃寺(11)よりも先行



第2図 坂田寺・木之本廃寺・山田寺の軒瓦 (1 : 4)

するので、(17) (18) も (10) より時期は古いと考えられる。すでに述べたように、木之本廃寺と山田寺所用の軒丸瓦にはほとんど時期差が認められない。山田寺式軒丸瓦の出現は、木之本廃寺(百済大寺?)はともかく、山田寺の造営が始まる641年以降であることはまちがいない。したがって、若草伽藍の塔の造営は、木之本廃寺軒瓦との関係から、山田寺式軒丸瓦が出現する641年以前に開始されていたと考えられ、(17) (18) (19) には641年以前に製作時期の1点を与えることができる。

若草伽藍所用の軒丸瓦の製作手法については、花谷浩によって詳細な検討が加えられている(花谷1987)。金堂所用の(14) (15) は回転台を用いて瓦当裏面をなで調整し、接合前に玉縁式丸瓦の筒部先端を片ほぞ形に切欠くなどの類似点がみられるので同じ造瓦集団が製作した可能性が強い。この2種の軒丸瓦の製作方法は、飛鳥寺や豊浦寺の(2) (3) などの星組の軒丸瓦に普遍的にみられるものである。

先述したように、(14) と (3) は同範で、(14) が後出する。(3) は豊浦寺では7世紀初頭の造営初期に使用が限定されると考えられることから、単に(3)の範が飛鳥から斑鳩に移動しただけでなく、製作に携わった造瓦集団の移動をも想定できる。また、平野山瓦窯で焼成された瓦の製作手法に(15)との類似点があることから、ここでも、範の移動だけでなく、若草伽藍の所用瓦を焼成した瓦窯からの造瓦集団を含めての移動を想定することもできる(上原1986、菱田1986)。

塔所用の(17)には、瓦当裏面に回転などの痕跡をもつものと、瓦当裏面を平坦に作りなで調整するものがあるが、両者とも接合前の丸瓦の筒部先端を片ほぞ形に切欠く。(14) (15) に比べ切欠きの幅が広くなり、まれに刻み目を入れた例もある。したがって、(17)は製作手法からみて金堂所用軒丸瓦の系譜下にあるといえよう。(18a)は瓦当裏面を凸レンズ状に盛り上げて作る例が多いが、丸瓦の筒部先端を片ほぞ形に切欠く例はみられず、筒部先端の凹面側を斜めに削っている。中房に蓮子を彫り加えて二重にした(18b)には、斜めに削ったあとで刻み目を入れた例が多い。

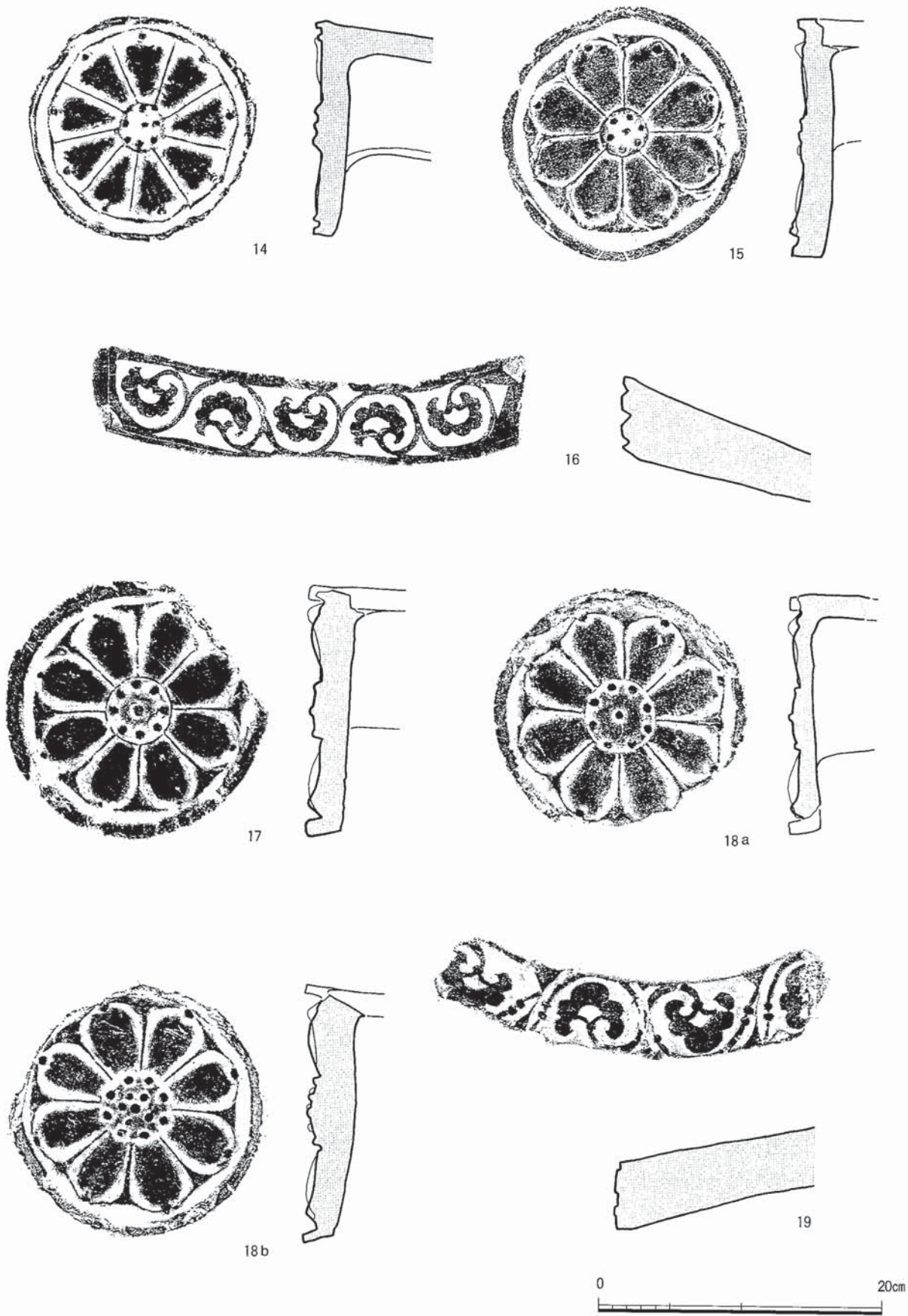
(17) と (18) の製作手法の違いについては積極的な見解をもっていないが、星組の軒丸瓦を作った造瓦集団は、飛鳥寺・豊浦寺・若草伽藍・四天王寺といったように瓦の供給先がたびたび変わったことと、片ほぞ形に切欠く手法に限ってみても、山田寺所用軒丸瓦では7世紀中葉以降にも存在すること、また、若草伽藍でも造営の初期段階から行基式丸瓦も使用されていることなどからみて、ここでは(18)を若草伽藍の星組の軒丸瓦の系譜の中でとらえるのではなく、別の造瓦集団によって製作された可能性も考えられることを指摘しておきたい。

Ⅲ. 飛鳥地域のその他の寺院

これまで、年代をある程度推定できる寺院と出土軒瓦について述べてきた。次に、文献史料にはあまり記録がないが、発掘調査が進んでいる飛鳥地域のその他の寺院から出土する軒丸瓦についてふれておこう。

a. 奥山久米寺

奥山久米寺(奥山廃寺、明日香村奥山)では、1987年の奈良国立文化財研究所の発掘調査で塔と金堂の一部が検出され、同時に大量の瓦が出土している(奈文研1988)。軒丸瓦の中には飛鳥寺(2)の直接的系譜下にあるとみられる瓦当文様をもつ星組の素弁十一弁軒丸瓦や、雪組の軒丸瓦が出土しており、奥山久米寺の創建が古いことを示している。



第3図 若草伽藍の軒瓦 (1 : 4)

軒丸瓦のなかでは、星組の角端点珠形式素弁八弁軒丸瓦 (20) [奥山Ⅱ型式A] が注目される。(20) は、瓦当文様からみると飛鳥寺・豊浦寺 (2) (3) の系譜下にあると考えられるが、整然と幾何学的に割り付けられた瓦当文様をもつことから、最も発展した段階のものともみてよい。また、(20) は中房の大きさ、蓮子の配置、間弁や外縁の形などから6種に分類されているが、これはこの種の軒丸瓦が比較的長期間にわたって使用されたことを示すものであろう²⁵⁾。

(20) は瓦当裏面をなで調整し平坦に仕上げている。接合前に玉縁式丸瓦の筒部先端を斜めに削っており、片ほぞ形に切欠く例はほとんどみられない。まれに、斜めに削った後で刻み目を入れている。玉縁式丸瓦はb手法のもので、c手法で製作されている木之本廃寺・山田寺所用のものより時期的に先行する可能性が強い。

平野山瓦窯では、若草伽藍 (15) と同範の四天王寺創建軒丸瓦→星組の角端点珠形式素弁八弁軒丸瓦→木之本廃寺 (10) と同範の四天王寺所用軒丸瓦、の順で焼成されたと考えられている (八幡市教委1985)。さらに、奥山久米寺では塔造営時にはじめて重弧文軒平瓦がともない、(20) には軒平瓦がともなわないと考えられている。したがって (20) は木之本廃寺・山田寺で出土する山田寺式軒丸瓦により時期的に先行し、下限は640年におくことができよう。上限については今のところ積極的な根拠をもたないが、奥山久米寺出土の星組の素弁十一弁軒丸瓦と (20) との関係から類推すれば、その出現時期を7世紀第Ⅰ四半期に遡らせることもできよう。

奥山久米寺では、塔の造営前の軒丸瓦として雪組の軒丸瓦の他に、弁端が反転する素弁八弁軒丸瓦 (21) [奥山Ⅳ型式B]、弁の先端が小さく突出する素弁八弁軒丸瓦 (22) [奥山Ⅳ型式A]、細弁の素弁十六弁軒丸瓦 (23) [奥山Ⅳ型式C] などがある。

(21) は瓦当文様をみると内区と外縁との間が狭く、外縁や外縁内側のなで・削り調整はみられない。範に粘土をつめて裏面を調整し丸瓦を立て、瓦当裏面と丸瓦の裏面に補強用粘土をおいたのち、接合部から瓦当裏面にかけて一連でなで調整する。したがって、丸瓦の剝離した例では補強用粘土をおいた際のすき間が生じ、そこで破損したものが多い。(21) は、(20) とともに奥山久米寺出土の塔に先行すると考えられる軒丸瓦の中で出土量が卓越し、また完形に近い例が多いことから塔に先行する建物に主体的に使用されたと推定できる。

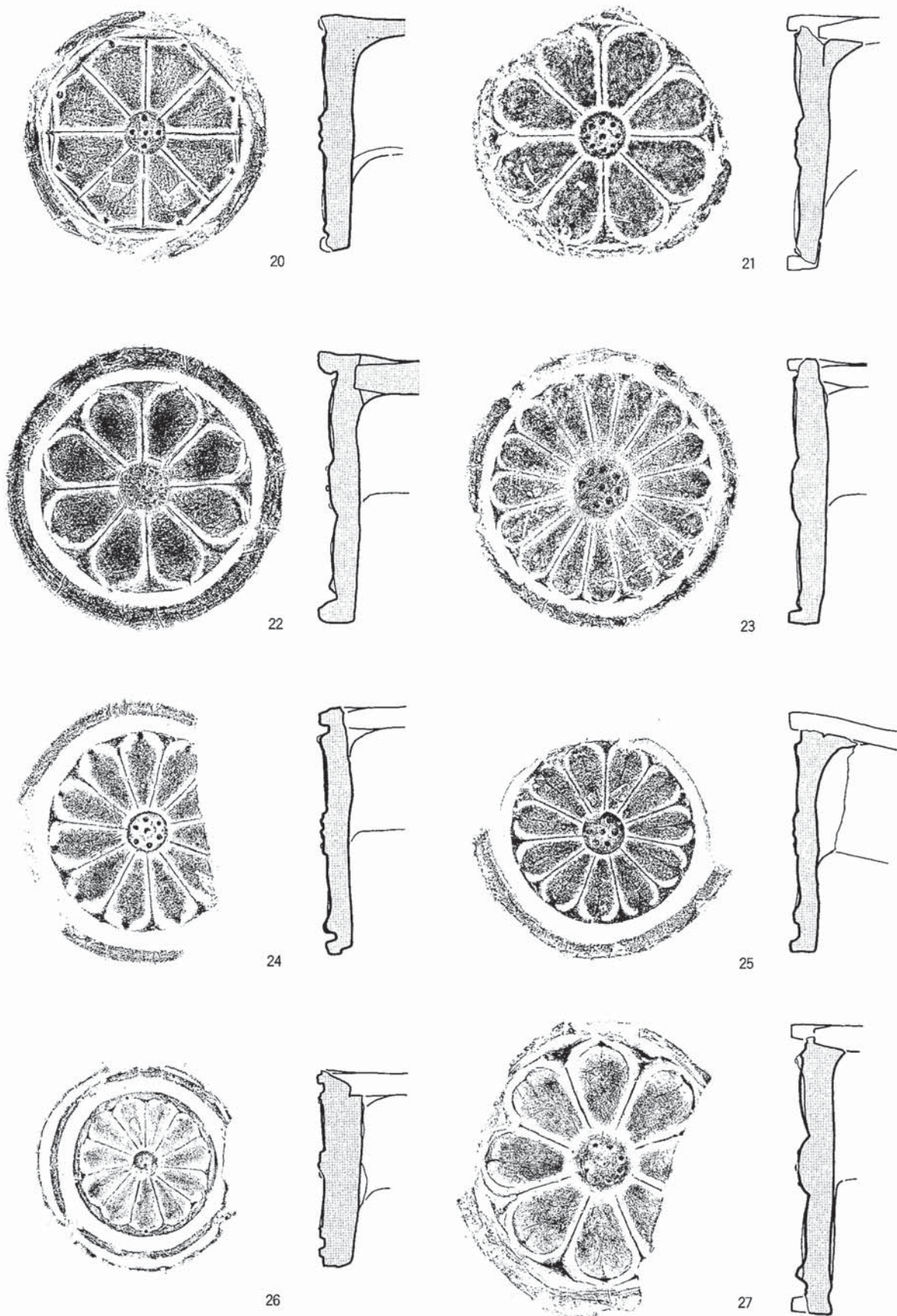
(22) は、(21) に比べて内区と外縁との間が広がり、外縁内側になで・削り調整がみられ、このときのへらや調整具のあたりを瓦当文様に残す例が多い。したがって、(22) は豊浦寺 (6) と同様に雪組の軒丸瓦の系譜下にあるといえよう。

これらの軒丸瓦は、中房が低い半球形を呈し、瓦当裏面はなで調整によりほぼ平坦に仕上げられている。また、接合前に丸瓦の筒部先端を凹凸両面から斜めに削り、まれに刻み目を入れている。以上のことから、この種の軒丸瓦は (20) や (6) と近い年代を想定でき、いずれも7世紀第Ⅱ四半世紀の中に納まるものと考えられる。

b. 定林寺

定林寺 (明日香村立部) では、小面積の発掘調査が数回行われた (奈文研1978)。創建時に使用された素弁十一弁軒丸瓦 (24) は、瓦当文様からは飛鳥寺 (2) の系譜下にあると考えている。

瓦当裏面はなで調整により平坦に仕上げ、接合前に行基式丸瓦の凹凸両面から斜めに削り、瓦当裏面上端に押し当てて薄く粘土をはりつけて接合する。まれに範から瓦当を外す前に、丸瓦の凸面端部付近に補足の叩きしめをおこなう例があり、このとき丸瓦の凹面の接合部付近に強いなで調整がおこなわれている。



第4図 飛鳥地域のその他の軒丸瓦 (1 : 4)

c. 檜隈寺

檜隈寺（明日香村檜隈）は、発掘調査により伽藍配置などが明らかにされた寺院の一つである（奈文研1980・1981・1982・1983a）。軒丸瓦では調査された塔や金堂などの遺構よりも时期的に先行すると考えられる素弁十一弁軒丸瓦（25）が注目される。（25）はb手法の玉縁式丸瓦を用い、接合前に丸瓦の筒部先端を斜めに削り、瓦当裏面上端に押しあて裏面中央部の粘土を接合面になで上げる特徴がある（補注1）。

d. 和田廃寺

和田廃寺（橿原市和田町）では発掘調査が数回おこなわれ、いまだ寺院の実態は十分には解明されていないが、鷗尾をはじめとする多量の瓦類が出土している（奈文研1975・1976b）。軒丸瓦の中には飛鳥寺（1）同範とみられるものがあり、創建が古いことを示している。また天理市豊田廃寺と同範と考えられる瓦当径が小さい素弁十一弁軒丸瓦（26）は、b手法の玉縁式丸瓦を用い、瓦当裏面との接合前に丸瓦の筒部先端を片ほぞ形に切欠くなどの特徴がある。瓦当裏面はなで調整により平坦に仕上げている。

和田廃寺ではこの他に、弁端が反転し半球形の中房をもつ素弁八弁軒丸瓦（27）が注目される。（27）は外縁の内側をなで・削り調整し、このときのあたりを瓦当文様に残す例が多い。接合前に丸瓦の広端を斜めに削り、接合後に瓦当裏面をなで調整し平坦に仕上げる。（27）は瓦当文様や製作手法的特徴からみて雪組の軒丸瓦の系譜下にあると考えられ、豊浦寺講堂所用軒丸瓦（6）や奥山久米寺（22）と相前後する年代を想定できよう。

IV. おわりに

以上、飛鳥地域の古代寺院から出土する軒丸瓦を中心に、年代観と製作手法について述べてきた。瓦当文様と製作手法の違いに注目してみると、造瓦技術の伝わった6世紀末の飛鳥寺造営時に2つの造瓦集団が存在したことが明らかになった。そして、この2つの造瓦集団の存在は、百済から渡来した4人の瓦博士によって伝えられた造瓦技術が2種類あったことに起因していると考えられるのである。また、豊浦寺、坂田寺の造営時にも瓦当文様や製作手法の違いから、新たな造瓦技術が導入されたと考えられる。すなわち、飛鳥寺の造営時以降にも、たびたび造瓦技術が伝わったことが明らかとなる。そして、はじめは各造瓦集団ごとに個性的な瓦作りがおこなわれたことがわかる。

7世紀前半になり各地で寺院の造営が本格化すると、初期の造瓦集団が範とともに各地へ移動したことが、軒瓦の同範関係や製作手法の共通性などから把握できる。たとえば、花組の軒丸瓦を作った造瓦集団は主に飛鳥地域を拠点とし、飛鳥寺に続いて坂田寺・和田廃寺へも瓦を供給している。また、飛鳥寺の主要伽藍の造営後に山背の高麗寺へ瓦を供給したと考えられる。一方、星組の軒丸瓦を作った造瓦集団は、飛鳥寺から豊浦寺・若草伽藍・四天王寺（平野山瓦窯）への移動を想定できる。さらに、和田廃寺・山田寺出土の軒丸瓦にも星組の軒丸瓦の系譜下にあると考えられるものがある。この他に、若草伽藍から木之本廃寺（吉備池廃寺）、木之本廃寺（吉備池廃寺）から四天王寺（平野山瓦窯）・海会寺への範の移動が明らかになっているが、これは単に範の移動にとどまらず、おそらく造瓦集団を含めての移動であったと推定されるのである。

寺院の造営の本格化に伴って各地を移動する造瓦集団の様相を、範の移動と造瓦技法の共通性から垣間みることができ、むしろこのような造瓦集団の移動は自発的なこととは考えら

れず、蘇我氏や聖徳太子をはじめとした当時の寺院造営者側の意向を色濃く反映したものと理解できる。また、6世紀末の飛鳥寺造営時の軒丸瓦の製作手法が、7世紀中葉の山田寺造営時にまで技術的改良を加えつつ用いられている。これは造瓦集団が初期の製作手法を長く保持していたことを示すもので、世代を越えて技術が受け継がれていったことを示している。

なお、飛鳥地域に限っても定林寺・檜隈寺・奥山久米寺などの軒丸瓦には、造瓦技術伝来のところにみられた瓦当文様と製作手法の対応関係がくずれた例がある。これは7世紀初頭以降に各地で寺院の造営が活発化し、造瓦集団が拡大かつ再編され、また造瓦集団間の交流がおこなわれたためと考えられる。したがって、瓦当文様から想定される造瓦集団と軒丸瓦の製作手法が一致しない例がでてくるのであろう。また、平野山瓦窯・隼上り瓦窯・幡伎瓦窯などでは瓦当文様の系譜が異なる軒丸瓦が製作されているが、これは各造瓦集団間での交流が活発におこなわれていたことを示している。

ところで、造瓦技術の変遷を巨視的にみると山田寺式軒丸瓦の出現する640年代に大きな変化が認められる。それは瓦当文様では蓮弁に子葉を重ねること、中房が半球形から直立して突出するようになり、さらに外縁を飾るようになることである。軒平瓦は若草伽藍などに先行例があるが、山田寺造営時にはじめて段顎の重弧文軒平瓦が出現し、以後主流となる。また木之本廃寺・山田寺造営時からC手法の玉縁式丸瓦が出現する。したがって、6世紀末の飛鳥寺の造営以降を第1段階とすれば、山田寺の造営がはじまる640年代を第2段階として評価することができるのである。

以上、飛鳥地域出土例を中心に7世紀前半までの軒丸瓦の瓦当文様、製作手法などを垣間みてきた。先学のすぐれた研究を十分に消化しきれず曲解と推論に終始した感が強いが、多くの御批判・御教示を得ることにより今後の研究の糧としたい。

註

- 1) 『日本書紀』崇峻元年(588)是歳条に、百濟から僧、寺工、鑪盤博士などとともに4人の瓦博士が渡来した記事が見える。なお、『日本書紀』の記事は、以下すべて『日本書紀 下』(岩波古典文学大系68、岩波書店、1965年)による。
- 2) たとえば、ここ数年に限っても坪井清足、田中琢、森郁夫、大脇潔などによって精力的な研究がなされ、帝塚山大学考古学研究所、京都国立博物館などで研究会がもたれている。(坪井1985、田中1984、森1983・1984・1987a・1987b、大脇1989a・1989b、上原1986、花谷1987、菱田1986、帝塚山大学考古学研究所1986・1987、京都国立博物館1987)など参照。
- 3) 『日本書紀』崇峻元年(588)是歳条の百濟からの技術者の渡来記事につづいて、同3年(590)に入って木を切りだし、同5年(592)仏堂(金堂)と歩廊(回廊)の造営に着手、推古元年(593)塔の心礎に舍利を埋納し、心柱を建て、同4年(596)造営が終わる。また推古17年(609)百濟からの漂流民を住ませたという記事がみえる。一方、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』(以下、『元興寺縁起』)が引く「丈六光銘」には、推古17年に元興寺(飛鳥寺)の造営が終わったことが記されており、この頃には飛鳥寺の主要伽藍の造営が完了していたとみてよい。
- 4) 坪井清足は、早くから飛鳥寺の出土瓦が2種に分類できることを指摘しており(奈文研1958)、最近の著作(坪井1985)においてもこれを踏襲しているが、飛鳥寺出土の星組の軒丸瓦は、後に花組の軒丸瓦をまねて作ったものという見解を示している。また、森郁夫は飛鳥寺出土の軒丸瓦が2種に大別できるとしている(森1980)。
- 5) 『飛鳥寺報告』では、飛鳥時代の軒丸瓦319点中(1)が172点、(2)が63点出土している。その後の飛鳥寺寺域内の調査でもこの2種の軒丸瓦の出土量が卓越している。
- 6) 森郁夫により飛鳥寺(2)の年代観が論じられている(森1983・1984)。

- 7) わが国最古の軒丸瓦は中房の上面が断面凹形を呈していた。飛鳥寺(1)(2)および豊浦寺(3)では、中房全体が偏平で低く突出し、若草伽藍(15)では中房の中央部が周縁部よりわずかに高く、奥山久米寺(21)のように低い半球形の中房、豊浦寺(6)のような半球形、山田寺(12)にみられる直に突出した段階という大まかな変化を指摘することができる。
- 8) 丸瓦の筒部先端の凹・凸面を斜めに削る手法は、それが丸瓦製作時に施された面取りか、瓦当裏面との接合直前におこなった加工か区別がつかない場合があり、注意を要する。小稿では、普通の丸瓦の製作方法と対比して判断したが、初期段階の削りの浅い例については、丸瓦製作時の調整を軒丸瓦製作時の調整と認識している可能性も否定できない。そうであれば初期段階ではなんら調整をしていないことになる。ただし後出段階では凹・凸両面から斜めに削り、断面くさび形に調整していることはまちがいない。
- 9) 飛鳥寺(1)の後出段階では、中房の周縁に圈線を巡らして中央部より突出させている。初期段階でみられた中房の周縁部を中央部より高くしようという意図が、引き続き存在していたと理解できる。この系譜下にある軒丸瓦として、飛鳥寺、高麗寺、姫寺などで出土する素弁十弁蓮華文軒丸瓦があげられよう。しかし、中房の中央部よりも周縁部を突出させたこれらの例は、飛鳥寺出土の軒丸瓦でもごく初期のものに限られ、他寺院から出土する軒丸瓦でもまれに存在するのみであることから、比較的早い段階でおこなわれなくなったと推定できる。
- 10) 瓦当裏面の周縁部になで調整して端部を突出させた軒丸瓦は、飛鳥寺(1)の後出段階をはじめとして、飛鳥寺Ⅵ型式、豊浦寺(6)、法隆寺7型式などにみられる。また、時期は後出するが、奥山久米寺の塔所用の山田寺式軒丸瓦には普遍的に存在する。(奈文研1958・1983・1986・1988)を参照。
- 11) 飛鳥寺出土の行基式丸瓦には凹面に模骨痕を残す例があり、丸瓦製作時に円筒状の成形台だけでなく模骨も利用されていたと考えられる。なお、同様の例が坂田寺・奥山久米寺でもみられる。模骨痕を観察すると、飛鳥寺例は直線的で板状のものを使用したと想定でき、奥山久米寺には丸みをもっていることから表面が丸いすだれ状のものを利用したと推定することもできる(上原1984)。
- 12) 大脇深から、飛鳥寺出土の中房が突出し中房周縁に圈線が巡る素弁十弁蓮華文軒丸瓦が高麗寺と、中房が突出せず圈線によって中房と蓮弁を区画する素弁十弁蓮華文軒丸瓦が姫寺と、それぞれ同範であるとの教示をえた。
- 13) 瓦当裏面を成形する際に回転台を利用した可能性を指摘したのは岩永省三で、若草伽藍創建時の軒丸瓦についてであった(岩永1982)。菱田哲郎はこの手法が飛鳥寺(2)をはじめとして各寺院でみられることを明らかにし(菱田1986)、花谷浩は若草伽藍の他の軒丸瓦にもこの調整が存在することを明らかにした(花谷1987)。
- 14) 瓦当裏面との接合前に、丸瓦の筒部先端を片はぞ形に切欠く手法の研究は、亀田修一による朝鮮半島出土軒丸瓦の製作手法に関する研究(亀田1982・1987)からはじまったといつてよい。亀田の業績は大いに評価される。一方、国内では菱田哲郎が飛鳥寺から豊浦寺、若草伽藍、四天王寺(京都府平野山瓦窯)という工人の動向とともに、この手法と回転を利用した調整の実態を明らかにした(菱田1986)。花谷浩も若草伽藍出土の軒丸瓦を通して、この手法と裏面の調整の時期的、技術的な変化を明らかにしている(花谷1987)。
- 15) 玉縁式丸瓦の製作方法の変遷については、毛利光俊彦が法隆寺出土例を(毛利光1984)、肥後弘幸が平野山瓦窯出土例を分析している(肥後1987)。また、上原真人は玉縁式丸瓦の時期的変化について述べている(上原1984)。
- 16) 坪井清足は、藤沢一夫が朝鮮半島では花組と星組の軒丸瓦が同時に存在し、丸瓦も行基式と玉縁式がみられる、と述べていることを引用している(奈文研1958)。小稿では、藤沢のこの説を積極的に評価し、飛鳥寺(1)(2)はともに飛鳥寺の造営当初に瓦博士の指導下で作られたと考えたい。
- 17) 白石太一郎は、福山敏男の「舒明朝」説を積極的に評価し(白石1982)、坪井清足は「推古朝」説を考えている(坪井1975)。また、菱田哲郎・森郁夫・小笠原好彦は豊浦寺出土の高句麗系(「雪組」、後述)の軒丸瓦の初源を7世紀初頭と考えており「推古朝」説といえよう(菱田1986、森1987a、小笠原1987)。
- 18) 土坑SK440から、飛鳥寺と同範の(2)が37点、(3)が34点出土している(奈文研1986)。
- 19) 雪組の軒丸瓦の製作手法については、隼上り瓦窯の調査者である杉本宏によって詳細な検討がなされ(宇治市教委1983、杉本1987)、さらに、菱田哲郎によって雪組の軒丸瓦がもつ特徴が明らかにされており(菱田1986)、両氏の業績は大いに評価される。小稿では、豊浦寺・平吉遺跡・奥山久米寺出土例を通して雪組の軒丸瓦の特徴を述べたが、2人の見解を追認することとなった。また森郁夫は雪組の軒丸瓦の年代観について明快に論じている(森1987a)。

- 20) 『日本書紀』推古14年(606)に鞍作鳥が近江国坂田郡に水田20町を給い、それをもとに金剛寺(坂田寺)を作ったという記事がある。
- 21) 坂田寺(7)は坂田寺に4種あるうちのひとつで、飛鳥寺(1)と酷似した瓦当文様をもつものと、そうでないものが存在し、瓦範の作者が複数いた可能性もある(奈文研1975)。
- 22) 坂田寺SG100では飛鳥寺(1)の系譜をひく坂田寺(7)や、坂田寺(8)(9)が出土しているが、山田寺式の軒丸瓦は出土していない。なお、山崎信二により坂田寺出土の軒丸瓦の詳細な検討がなされている(山崎1983)。
- 23) 山田寺の造営は、舒明13年(641)に金堂を建立し、大化5年(649)の蘇我倉山田石川麻呂の死による中断ののち、天武5年(676)に塔が完成している。
- 24) 山田寺所用軒丸瓦はA~Fの6種があり、軒平瓦もA~Dの4種類以上あるが、金堂には各々のA種が組み合わせることが判明している。
- 25) 6種のうち、石神遺跡出土例と同範と考えられるものがある。この他に京都府平野山瓦窯出土例、奈良県五條市天神山瓦窯出土例と同範かとみられるものもある(近江1977、八幡市教委1985、菱田1986、奈文研1988)。

(補注1) 納谷さんは、ここで注釈を入れて「上原真人は、定林寺(25)、檜隈寺(26)を四天王寺出土例としている。」とし、(上原1986)を参考文献にあげている。問題の部分は、(上原1986)の「法隆寺・四天王寺古瓦年表」335頁に12・13として掲出された軒丸瓦の拓本である。上原は、中房蓮子1+4の素弁十弁蓮華文軒丸瓦(年表番号12)を四天王寺出土とし、その参考資料として定林寺の中房蓮子1+6の素弁十一弁蓮華文軒丸瓦(年表番号13)を掲げている。四天王寺例(年表番号12)は、重文指定の「無子葉弁十葉蓮華文軒丸瓦」(『四天王寺古瓦聚成』四天王寺文化財管理室1986年、64~65・134頁No.44)であり、蓮子数と弁数が違うので定林寺や檜隈寺出土例とは別のもので、上原もそのような扱いはしていない。よって、注釈を省いた。(花谷記)

後記

納谷さんが脱稿後、15年を経過してしまっていることもあり、いくつか手を入れたところがある。主要な変更点を列記しておく。(花谷記)

- ① 原文では、単弁無子葉と単弁有子葉がともに「単弁」と表記されていたが、単弁無子葉は「素弁」、単弁有子葉を「単弁」と区別した。
- ② 軒瓦の型式番号を[]内に補足した。型式分類については、『古代瓦研究Ⅰ』(奈文研、2000年)と、花谷浩「京内廿四寺について」(『研究論集ⅩⅠ』奈文研、2000年)、『法隆寺の至宝 瓦』(昭和資料帳15、小学館、1992年)を参照されたい。
- ③ 本文3頁で、玉縁式丸瓦の製作技法をa~c手法に分類している。このうち、b手法について、納谷さんはさらにb1・b2に細分していた。だが、入手した原稿ではこのあたりの文章が一部脱落していたため、細分基準が不明であった。原稿全体をみても、b手法の細分案はほかの箇所に登場せず、論旨に関わらないと判断したので、b1・b2手法の細分に関する記述を削除した。
- ④ 敬称はすべて略した。
- ⑤ 挿図に使用した資料のうち、第1図5は奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の所蔵品である。掲載にあたり、同館大西貴夫氏の高配をたまわった。なお、挿図はすべて藤原調査部の石田由紀子さんに作ってもらった。両氏に深謝。

参考・引用文献

- 岩永省三1982 「瓦類」(『法隆寺発掘調査概報Ⅰ』法隆寺)
- 上原真人1984 「瓦の見方について」『富山市考古資料館紀要』第3号
- 上原真人1986 「仏教」『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店
- 宇治市教育委員会1983 『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第3集
- 近江昌司1977 「五条市天神山瓦窯の遺跡と遺物」『国学院雑誌』第78巻9号
- 大脇 潔1989 a 「七堂伽藍の建設」『古代史復元8 古代の宮殿と寺院』、講談社
- 大脇 潔1989 b 『飛鳥の寺』日本の古寺美術14、保育社
- 小笠原好彦1987 「瓦当文様に見える韓国の要素—近畿—」『研究集会「日韓の古代屋瓦」』
- 亀田修一1982 「百済古瓦考」『百済研究』12、忠南大学校

- 亀田修一1987 「瓦当文様に見える韓国の要素『西日本』」『研究集会「日韓の古代屋瓦」』京都国立博物館
京都国立博物館1987『研究集会「日韓の古代屋瓦」』。
- 白石太一郎1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集
- 杉本 宏1987 「埴上り瓦窯を中心にして」『歴史考古学を考える—古代瓦の生産と流通—』帝塚山大学考古学研究所
- 田中 琢1984 「古代窯業の展開」『窯業』講座・日本技術の社会史第4巻、日本評論社
- 坪井清足1975 「飛鳥寺の創立」『古代の日本5 近畿』角川書店
- 坪井清足1985 「飛鳥の寺と国分寺」古代日本を発掘する2、岩波書店
- 帝塚山考古学研究所1986 「古代の瓦を考える—年代・生産・流通—」
- 帝塚山考古学研究所1987 「歴史考古学を考える—古代瓦の生産と流通—」
- 奈良国立博物館1970 「飛鳥・白鳳の古瓦」東京美術出版
- 奈良国立文化財研究所1958 「飛鳥寺発掘調査報告」奈良国立文化財研究所学報第5冊（『飛鳥寺報告』と引用することがある）
- 奈良国立文化財研究所1975 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報5」
- 奈良国立文化財研究所1976 a 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ」奈良国立文化財研究所学報第27冊
- 奈良国立文化財研究所1976 b 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報6」
- 奈良国立文化財研究所1978 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報8」
- 奈良国立文化財研究所1980 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報10」
- 奈良国立文化財研究所1981 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報11」
- 奈良国立文化財研究所1982 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報12」
- 奈良国立文化財研究所1983 a 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報13」
- 奈良国立文化財研究所1983 b 「南都七大寺出土軒瓦式一覽(1) 法隆寺」
- 奈良国立文化財研究所1986 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報16」
- 奈良国立文化財研究所1987 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報17」
- 奈良国立文化財研究所1988 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報18」
- 花谷 浩1987 「飛鳥・奈良時代の軒丸瓦について」『伊珂留我 法隆寺昭和資財帳調査概報7』小学館
- 肥後弘幸1987 「平野山瓦窯覚え書き—出土遺物の再整理—」『京都府埋蔵文化財論集 第1集』京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 菱田哲朗1986 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第69巻第3号、京都大学史学会
- 福山敏男1935 「豊浦寺の創立に関する研究」『史学雑誌』第46巻第12号
- 藤澤一夫1961 「屋瓦の変遷」『世界考古学大系4』平凡社
- 藤澤一夫1967 「遺物」『四天王寺』文化財保護委員会
- 文化庁1968 「法隆寺若草伽藍跡昭和43年度発掘調査概報」
- 森 郁夫1980 「瓦のロマン 古代からのメッセージ」毎日新聞社
- 森 郁夫1983 「若草伽藍の瓦」『法隆寺発掘調査概報2』法隆寺
- 森 郁夫1984 「若草伽藍創建時の瓦」『伊珂留我 法隆寺昭和資財帳調査概報2』小学館
- 森 郁夫1987 a 「高句麗系軒丸瓦の初源」『國學院大学考古資料館研究紀要3』
- 森 郁夫1987 b 「古代山背の寺院造営」『学叢』第8号、京都国立博物館
- 毛利光俊彦1984 「瓦類」『法隆寺発掘調査概報Ⅲ』法隆寺
- 八幡市教育委員会1985 「平野山瓦窯発掘調査概報」
- 山崎信二1983 「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 山城町教育委員会1988 「史跡高麗寺跡第4次範囲確認調査概報」
- 和田 幸1969 「殯に関する基礎的考察」『史林』第54巻第5号、京都大学史学会